

ショックの兆候

蒼白、虚脱、冷汗、呼吸不全…

迅速に見極め

製鉄記念 室蘭病院 医師ら情報共有

救急救命の最前線を支える胆振管内の消防・救急隊員と、製鉄記念室蘭病院(前田征洋病院長)による「救急症例検討会」が、室蘭市知利別町の同病院で開かれ、「ショックの鑑別や対処」をはじめ、同病院に搬送された4症例について意見交換。救急医療技術の向上を目指して、情報を共有した。

(松岡秀直)



救急医療技術の向上を目指して「ショックの鑑別や対処」などについて、意見を交わした救急症例検討会

6月19日に開かれ、室蘭、登別、西胆振、白老各消防の救急隊員や、同病院の医師ら約90人が参加。高橋弘・循環器内科長は「細胞や臓器に不可逆的な障害が生じて、急速に多臓器不全に陥り、さらに心肺停止に陥る『ショック』」を見極めるため、病態生理をまず把握することなどを説明した。

高橋科長は「5P(蒼白、虚脱、冷汗、脈拍触知不能、呼吸不全)による『ショックの兆候』に触れ、「ショックの兆候をいち早く感じ取り、迅速なバイタルサインの確認、病歴確認、フィジカルアセスメントが重要」と強調した。

その後、白老町消防本

部の遠藤領己さんが「転院搬送中ショック状態に陥った症例」を説明。救急隊員は搬送元からの傷病者情報だけにとらわれることなく、「限られた資機材の中で最大限の観察、処置を続けなければいけないことを再確認した」などと報告した。

このほか、室蘭市消防本部の福山朗広さんが「肺塞栓症から意識障害を呈した症例」、西胆振行政事務組合消防本部の石川裕己さんが「高カリウム血症として診断された症例」、登別市消防本部の石田竜さんが「脳卒中が疑われた心疾患症例」について発表した。

一方、前田病院長は、心疾患の診断に不可欠な「12誘導心電図のデータ」を救急搬送中に取得し、モバイルを用いてデータを同病院に送る「12誘導心電図伝送システム」などを説明。

同システムは、室蘭、登別両消防本部の救急車各1台ずつに配備され、昨年4月から始まった。前田病院長は、両消防本部の増設や、西胆振行政事務組合消防本部、白老町の各消防本部の救急車にも搭載する必要性などを解説した。